

今日の説教のポイント<ヨハネによる福音書9章24～34節>

①「問いかけ」のなかで深められていく認識の大切さ。

わたしたちはなにかを問われたときに、答えを求めようとします。哲学では「魂の助産術」と言い、改革派は聖書に書かれていることへの理解を深めるために、伝統的に「信仰問答」を重んじてきました。問いかけを意識的にすることによって真実に近づく方法です。わたしたちは問いかけられています。「イエス・キリストとは、わたしたちにとって一体、誰なのか。なにをされるお方なのか。」盲目を癒された人に向けられるファリサイ派の詰問は、むしろ真実へと彼を導いています。

②イエス・キリストとはわたしたちにとって「誰」なのか。

ヨハネによる福音書は「対話」の福音書と言えます。イエス様といろんな人が対話をして、救い主としてのイエス様のお姿をあらわしていきます（第三章ニコデモ、第四章サマリアの女、第十八章ポンテオ・ピラトなど）。ヨハネ第九章は、イエス様に代わって盲目を癒された一人の男をめぐる話が展開します。ファリサイ派が詰問を加えるなかで、徐々に深められている「イエス・キリストが誰か」という問いに対する彼の答え。それは「救い主はだれか」という真実に迫っていく、信仰生活のプロセスを要約しているようです。

③問いかけられることは単なる苦しみなのか。意味のある苦しみとは？

対話はファリサイ派が男を共同体から追い出して終わります。時代によっては、「あなたにとってイエス・キリストとは誰なのか」という問いかけが苛烈になされることがありました。話題作『沈黙』は、その時代のことを考えるという点で注目されるべき作品でありましょう。内容の賛否はありますが、あのような苛烈な問いをかけてくる時代があり、それでもなお「わたしを救ったのは、あの方です」と告白する群れが絶えることはありませんでした。なぜか？それは、イエス・キリストがあらゆる苛烈な責めをすべて受け止め復活されたお方だから。イエス様が十字架を背負われた受難節、意味のある苦しみを知る良い機会です。